

指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書 (30)

遺跡範囲確認調査報告書

# 橋牟礼川遺跡XIV 上吹越遺跡

1999年3月

指宿市教育委員会





## 序 文

本書は、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の北東側近接地ならびに市内の重要遺跡の確認調査成果をまとめたものです。

橋牟礼川遺跡野発掘調査は、第33次を数え、周辺の状況が把握されつつあります。

今回の調査によって、国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡の北東側近接地から橋牟礼川遺跡と同様の文化層の堆積が確認され、874年の開聞岳噴火で埋没した平安時代の畠と奈良～平安時代の柱穴群が検出されました。

また、市内東部の上吹越遺跡からは、弥生時代中期後半～終末期の土器が出土し、付近に弥生時代の集落の存在が予測されるようになりました。

このように、指宿市内の各地から次々と遺跡が発見され、本市の古代の歴史が刻々と明らかになってきています。

本書が皆様に活用され、将来に守り伝えられるべき遺跡の保存に役立てられることを願ってやみません。

この調査にご指導、ご協力を頂きました関係各位、ならびに地元の皆様に対し心から感謝申し上げ、序文にかえさせていただきます。

平成10年3月  
指宿市教育委員会  
教育長 山下隼雄

## 例 言

1. 本書は、平成10年7月1日から平成11年3月31日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する橋牟礼川遺跡、上吹越遺跡の確認調査報告書である。
2. 調査、及び整理・報告書作成に要した経費3,000,000円のうち、1/2は国、1/4は県からの補助を得て行った。
3. 調査は、指宿市教育委員会が実施し、鎌田洋昭が担当した。  
調査の組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	教 育 長	山下 隼雄
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	社会教育課長	室屋 昭男
発掘調査担当	指宿市教育委員会	社会教育係長	馬場 隆夫
		派遣社会教育主事	原口 洋
		社会教育係主査	川畑 忠晴
		社会教育係主査	宮原 智子
		文化係長	小村 重志
		文化係主査	寺田 昭宏
		文化係主事	大道 裕子
		文化係主査	下山 寛
		文化係主査	中摩浩太郎
		文化係主事	渡部 徹也
		文化係主事	鎌田 洋昭

### 発掘調査員

発掘作業員 上原節男、冨田昭雄、浜崎いち子、阿久根ノリ子、井上ヒサ子、東 富子、林山イネ、竹下カツエ、下之園トシ子、吉元トシエ、新小田千恵子、谷門節子、浜崎ヒロ子、徳永シグ子、上高原聡  
整理作業員 前田恵子、清秀子、竹下珠代

4. 各調査の原図・製図作成者については、目次に記す。執筆は、鎌田洋昭、中摩浩太郎、渡部徹也が分担した。本文については文中末尾にそれぞれ文責を記す。本書の電算編集は、渡部徹也が行った。
5. 遺構の写真撮影については、鎌田洋昭が行った。遺物の写真撮影については、渡部徹也が行った。
6. 本書のレベルはすべて絶対高である。また、図中に用いられている座標値は国土座標系第IX系に準ずる。
7. 本書の層位の色調は、「標準土色帖」1990年版に基づく。
8. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、「橋牟礼川遺跡Ⅲ」（1992、指宿市教育委員会）に準ずる。
9. 本調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館「時遊館COCCOはしむれ」でこれを保存し、活用している。

## 本文目次

### 橋牟礼川遺跡範囲確認調査（南丹波遺跡地点編）

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 遺跡の層位	3
第3章 確認調査	4
第1節 調査地点の概要	4
第2節 調査地点の層位	4
第3節 遺構について	5
第4章 考察	9

### 上吹越遺跡

第1章 遺跡の位置と環境	15
第2章 遺跡の層位	15
第3章 確認調査	16
第1節 調査の経緯と概要	16
第2節 調査地点の層位	16
第3節 遺構について	16
第4節 遺物について	21
第4章 考察	26

## 挿図目次

第1図 遺跡所在位置図（S=1/50,000）	1
第2図 遺跡地点位置図（S=1/500）	2
第3図 橋牟礼川遺跡標準層位模式図	3
第4図 トレンチ位置図（S=1/200）	4
第5図 第6層検出の当跡平面図・コンタ図（S=1/20）	6
第6図 西壁・北壁層位断面図（S=1/20）	7
第7図 第7層上面検出ピット平面・断面図（S=1/20）	8
第8図 上吹越遺跡標準層位模式図	15
第9図 上吹越調査地点図（S=1/20）	17
第10図 遺構検出状況図（S=1/50）	18
第11図 層位断面図①（S=1/20）	19
第12図 層位断面図②（S=1/20）	20
第13図 遺物実測図①（S=1/7）	21
第14図 遺物実測図②（S=1/2）	22
第15図 遺物実測図③（S=1/2）	23
第16図 遺物実測図④（S=1/2）	24
第17図 遺物実測図⑤（S=1/2）	25

## 表 目 次

表 1 遺物観察表 1 .....	27
表 2 遺物観察表 2 .....	28

## 写 真 図 版 目 次

PL. 1 橋牟礼川遺跡調査地点と遺構検出の状況 .....	10
PL. 2 橋牟礼川遺跡遺構検出の状況① .....	11
PL. 3 橋牟礼川遺跡遺構検出の状況② .....	12
PL. 4 橋牟礼川遺跡遺構検出の状況と層位 .....	13
PL. 5 上吹越遺跡調査地点 .....	29
PL. 6 層位の状況 .....	30
PL. 7 遺構検出状況① .....	31
PL. 8 遺構検出状況② .....	32
PL. 9 上吹越遺跡出土遺物① .....	33
PL. 10 上吹越遺跡出土遺物② .....	34
PL. 11 上吹越遺跡出土遺物③ .....	35
PL. 12 上吹越遺跡出土遺物④ .....	36

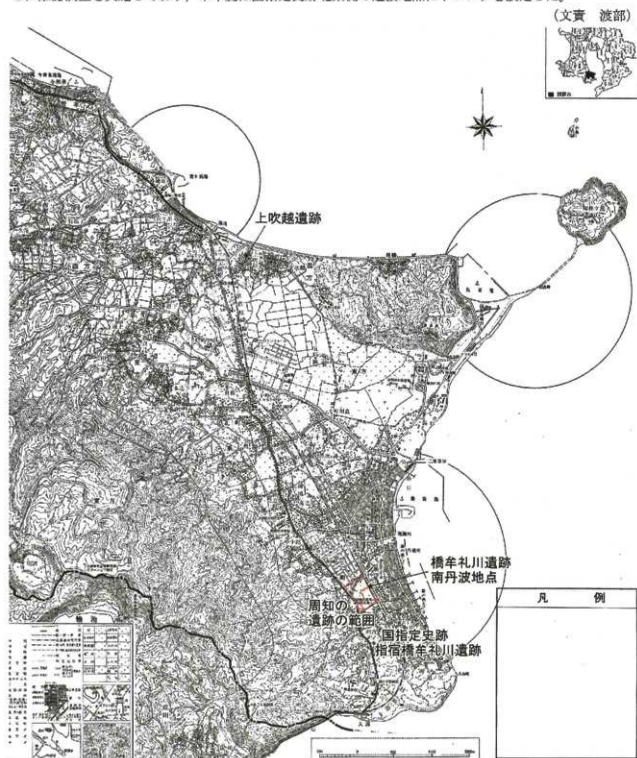
橋 牟 礼 川 遺 跡

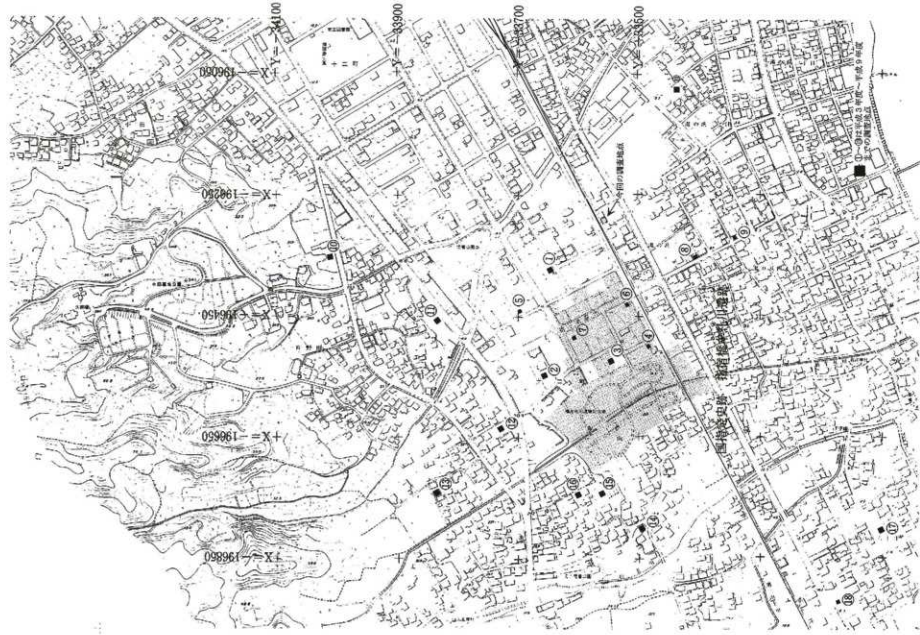




## 第1章 遺跡の位置と環境

国指定史跡指定橋牟礼川遺跡は、指宿市十二町下里に位置する。遺跡は、山裾から海岸に向けて緩やかに傾斜する海拔10～20m前後の火山性扇状地にあり、遺跡の南西約10kmにある開聞岳噴火によって、度重なる被害を受けてきた火山災害遺跡として知られている。範囲確認調査は、平成3年度から年次的に実施し、遺跡の広がりと内容を確認してきた。平成7年度には、調査成果に基づき、約1.8haが国指定史跡の追加指定を受けた。7年度以降は、これまでに引き続き国指定史跡周辺の遺構の所在と性格を把握するために確認調査を実施しており、本年度は国指定史跡北東側の近接地点にトレンチを設定した。





第2図 調査地点位置図(S=1500)

## 第2章 遺跡の層位

以下に橋牟礼川遺跡標準層位をあげる。なお、調査地点の細かな特徴については、次章で後述する。

第1層	第1層 黒褐色土層(表土) 旧耕作地である。現代の層である。
第2層	第2層 暗灰色土層 近代～現代に至る遺物が含まれている。旧耕作土でもある。
第3層	第3層 黒灰色土層 近世～近代に至る遺物が含まれている。旧耕作地でもある。
第4層a	第4層 黒色土層 中世(鎌倉～室町時代)の遺物包含層。黒ボタのような腐植土力裏達している。厚さは20～50mm前後で、宋代の青磁や白磁、回転糸切り底の上師器などが検出される。
第4層h	第5層 a 紫灰色火山灰層(紫コラ) 平安時代開闢岳噴出物堆積層で、フォール・ユニットを形成する。第5層 c と一連の噴火による噴出物とする考えがある。
第5層a	第5層 b 紫灰色火山灰二次堆積物 第5層 c (貞観16年開闢岳噴出物)の二次堆積層で、水流作用で生成されたものと考えられ砂が多く混在し、ラミナが発達する。
第5層b	第5層 c 紫灰色火山灰層(紫コラ) 貞観16年3月4日(西暦874年)の開闢岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて固く団結し、フォール・ユニットが認められる。
第5層c	第6層 a～c 暗オリーブ褐色土層 奈良～平安時代の遺物包含層で、その上面は貞観16年の開闢岳噴出物で被覆されていることから、貞観16年の火山噴出物降下直前の旧地表形状をそのままとどめていると考えられる。第6層は腐植化が進行している c、c に比べ明るいオリーブ褐色を呈する b、a は第7層の二次堆積層と3層に分層が可能である。
第6層a	第7層 青灰色固結火山灰層(膏コラ) 7世紀最終四半世紀頃に比定される開闢岳噴出物堆積層で、下部は火山活動初期のスコリアが2～3cm程度堆積する。
第6層b	第8層 橙色土層 砂や池田湖起源の噴出物、軽石を含む扇状地堆積層。古墳時代末頃の土石流堆積物と考えられる。
第6層c	第9層 暗褐色土層 古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田湖降下軽石を含みやや粘質である。厚さは50cm～1m程度である。第9層の中位から遺構が掘り込まれる場合などは、埋土色調、粒度から判別することが難しい。第9層の形成は、基本的に扇状地堆積物であるが、集落形成等の土地利用による擾乱や河川の氾濫による要因が複合していると考えられる。
第7層	第10層 赤褐色粘質土層 弥生中～後期の遺物包含層で、扇状地堆積物と考えられる。
第8層	第11層 暗紫色火山灰層(暗紫コラ) 弥生時代中～後期以降に降下した開闢岳噴出物堆積層。
第9層a	第12層 明褐色土層 弥生時代前～中期にわたる遺物包含層で粘性が強い。
第9層b	第13層 暗褐色小石混シルト質土層 主に刻目突帯文土器を包含する層で、小礫を含む。
第9層c	第14層 赤褐色小石混シルト質土層 主に縄文時代晩期の遺物を含む。黒川土器が主体。
第10層	第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層 主に縄文時代晩期の遺物を含むが、後期の遺物も混在する。
第11層	第16層 黒褐色橙色バミス混シルト質土層 主に縄文時代後～晩期の遺物を含む。
第12層	第17層 暗青灰色火山灰層(黄コラ) 縄文時代後期の開闢岳噴出物堆積層。
第13層	第18層 灰褐色砂質土層 縄文時代後期遺物包含層で下部は池田湖火山灰に変化する。
第14層	第19層 池田湖火山灰層 灰色～黄灰色を呈する層で、約5,500年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものと考えられている。
第15層	
第16層	
第17層	
第18層	
第19層	

指宿市教育委員会『第IV章 遺跡の層序』「橋牟礼川遺跡Ⅲ」を抜粋、一部改変。

第3図 橋牟礼川遺跡標準層位模式図

## 第3章 確認調査

### 第1節 調査地点の概要

確認調査トレンチは、平成8年度に追加指定された国指定史跡橋幸礼川遺跡の東端から約70m離れた民家に挟まれた空き地に設定した。本地点は、昭和61年度から平成3年度に実施された指宿駅西部土地区画整理事業に伴う橋幸礼川遺跡の発掘調査成果から、西暦874年に比定されている開聞岳の火山灰（通称、紫コラ）直下面において畠跡や道跡の検出が予想されていた。また、前掲した発掘調査で検出された古墳時代の集落跡の広がりも確認できるのではと期待された地点である。（文責 鎌田）

- (1) 下山寛 中塚浩太郎 渡部徹也 鎌田洋昭 『橋幸礼川遺跡VI』 指宿駅西部土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告書 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 指宿教育委員会 1994年

### 第2節 調査地点の層位

調査地点はかつて畑地として利用されていたため、地表面は耕作土が堆積していた。それより下層は、橋幸礼川遺跡の基本層序に準拠して説明していく。

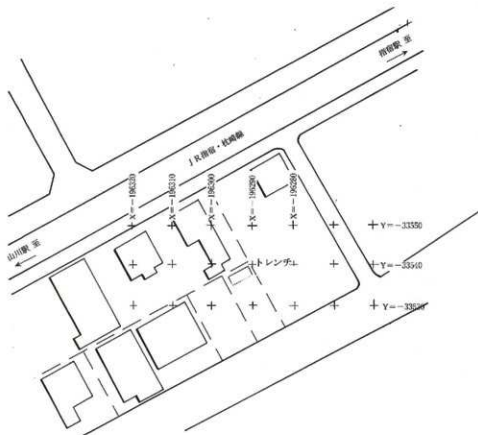
第4層は、中世の堆積物包含物である。当トレンチでは遺物は出土していない。第5層は、紫灰色火山灰層で二次堆積層も含め、a・b・cに細分できる。ここでは、一次堆積物比定されている第5層cが顕著に認められる。非常の固結しており、フォール・ユニットが確認される。第6層は、奈良～平安時代の遺物包含層である。直上面は第5層cにより被覆されていることから、噴火直前の旧地形をとどめていると考えられる。第6層は腐植化が進行しているa、aに比べ明るいオリーブ褐色を呈しているb、第7層の二次堆積層のc層の3層に細分できた。第7層は、青灰色固結火山灰層である。

今回は、第6層上面で平安時代の畠跡、第7層上面での奈良時代の柱穴を確認し、調査を終えた。

（文責 鎌田）

#### 参考文献

- 渡部徹也 鎌田洋昭 『橋幸礼川遺跡X』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集 指宿教育委員会 1996年



第4図 トレンチ位置図(S=1/200)

### 第3節 遺構について

#### (1) 西暦874年3月25日の畝跡

トレンチ内において、第1層、第4層を掘下げ、第5層cの火山灰を除去している段階において、第6層を带状に三条検出することができた。この段階において、畝の畝頭の一部である可能性が考えられたため、畝を形成していると考えられる第6層を残しながら火山灰層のみを除去した。火山灰層の下層に堆積している火山礫は、畝頭ではほとんど堆積しておらず、2条検出された畝間溝の下場に厚く堆積していた状況である。

火山灰・火山礫で埋没していた畝や畝間溝を形成している土壌は、非常に柔らかく、畝立て直後の状況を留めているような印象を与える。

トレンチ内で検出された畝と畝間溝は、第5図に示しているとおりほぼ東西方向に伸びている。

畝の最大幅は約90cmを測り、畝の高さは畝間溝の下場からの計測では約25cmを測る。本トレンチで検出された畝や畝間溝から構成されている畝跡は、橋半礼川遺跡内で実施された下水道管きよ布設事業や区画整理事業、博物館建設事業に伴う発掘調査で検出された畝跡と同様な形態のものと考えられ、畝幅が非常に広い特徴を持っている。

東西に伸びる畝間溝は2条検出された。それと同時に、畝の伸びる方向と直角に交差する形の溝も検出され、三条の畝はそれによって途中で区切られている状況を呈している。畝間溝の幅は、畝間溝の下場の計測で、5～20cmを測る。

畝間溝の直下面で、第7層上面に畝間溝をつくる際の工具痕跡が残存していないかどうか検出を試みたが、明瞭に工具痕跡と判断できるものは検出することができなかった。

(文責 鎌田)

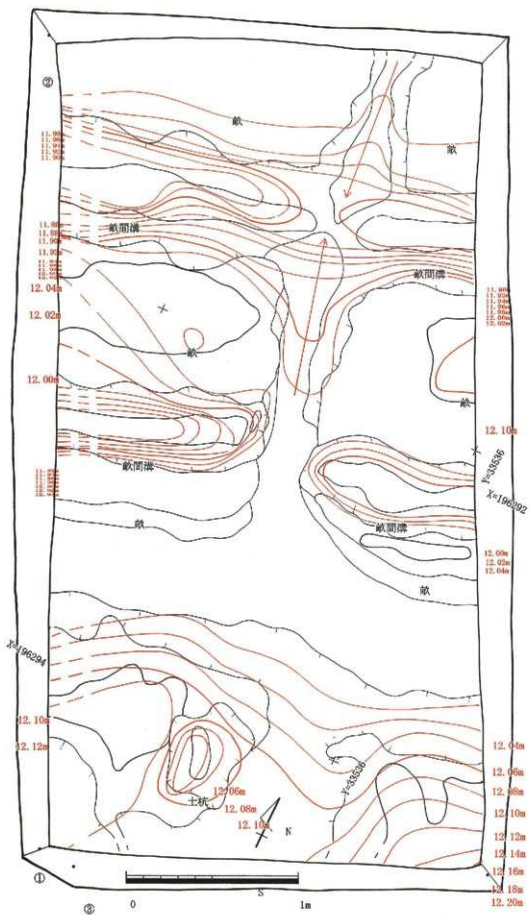
#### (2) 青コラ上面検出の柱穴

本トレンチ内において、畝跡検出面より下層の包含層における遺物や遺構の有無の確認を目的として、西壁よりに長さ4m75cm、幅25cmの先行トレンチを設定し、部分的に第6層を除去した。その結果、第7図に示しているとおり、第7層上面において、第6層を埋土とする柱穴と考えられる遺構を検出できた。

柱穴と考えられる遺構は合計で7基が確認できた。しかしながら、掘下げを行った面積が狭いため、遺構のプランを把握することはできなかった。第7層上面で検出された柱穴の法量については、第7図中の一覧表を参照して頂きたい。また、先行トレンチからは、土師器片と考えられる小片が1点出土したが、時期を特定するまでには至らなかった。

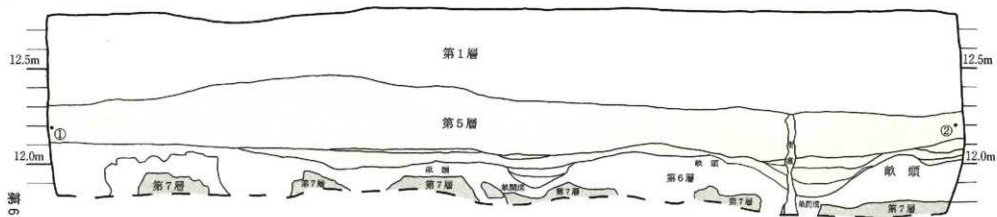
面積は狭いものの、確認調査を行った範囲においては、奈良時代から平安時代にかけての建物遺構が存在している可能性が示唆された。

(文責 鎌田)

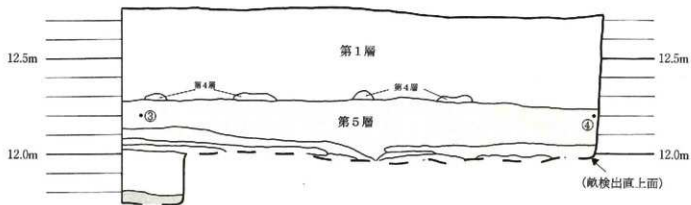


第5図 第6層検出の鳥跡平面図・コンタ図 (S=1/20)

西壁

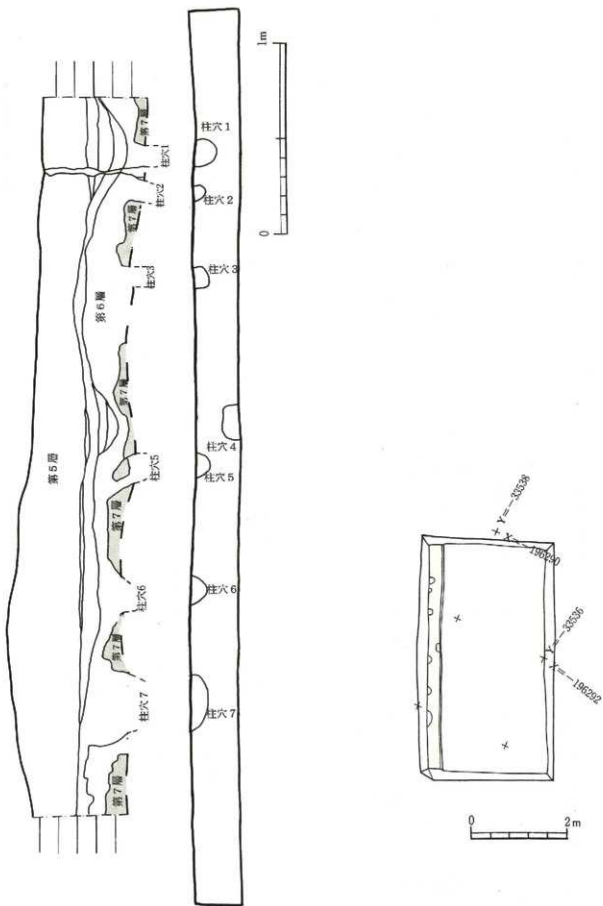


北壁



第6圖 西壁・北壁斷面圖 (S=1/20)





第7図 第7層上面検出ビット平面・断面図 (S=1/20)

## 第4章 考 察

今回の調査では、前記したとおり2つの遺構を検出することができた。

一つめは、平安時代の貞観16年3月4日（現行暦；西暦874年3月25日）に比定できる開闢岳の火山性噴出物堆積層（紫コラ：第5層c）に直接被覆された畠跡である。これまでの橋牟礼川遺跡の発掘調査では、国指定史跡の範囲より東側の地点では、第5層cで直接被覆された畠跡の検出はなかった。このことから、今回の調査で貞観16年の開闢岳噴火で直接的に火山災害を受けた集落において、食料生産地である畠地が、国指定史跡の東側でも営まれていたことが判明した。

二つめの成果は、7世紀最終四半世紀頃に噴火したと考えられる開闢岳の火山性噴出物堆積層（青コラ；第7層）の直上面で、柱穴と考えられる遺構が検出されたことである。第6層が埋土となっていたことから、柱穴と考えられる遺構は、奈良時代～平安時代の時期に帰属するものと判断できる。

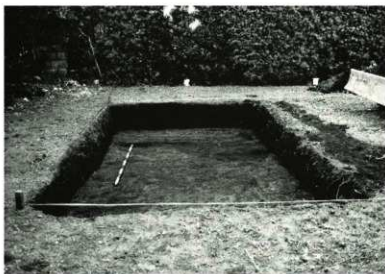
指宿駅西部土地区画整理事業に伴う橋牟礼川遺跡発掘調査では、今回確認調査を実施した地点から南西方向に約100mの地点から、掘立柱建物跡が5基検出されており、それらの遺構群との関連についても今後、検討していく必要がある。

今回の確認調査は調査面積が狭小であったものの、これまでの橋牟礼川遺跡での成果を追認することができたと同時に、確認されていた奈良～平安時代の集落の範囲がさらに東側へ広がっていることを新たに確認できた。

（文責 鎌田）



トレンチ設定状況



第5層上面検出状況



畚検出作業状況

PL. 1 橋牟礼川遺跡調査地点と遺構検出の状況



畠検出状況



畠検出状況 (西側から①)



畠検出状況 (北側から①)

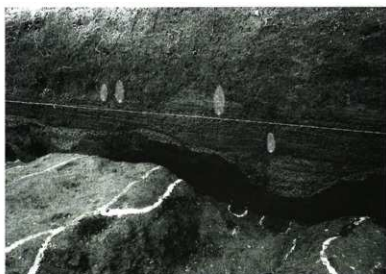
PL. 2 橋牟礼川遺跡遺構検出の状況①



畠検出状況（西側から②）



畠検出状況（北側から②）

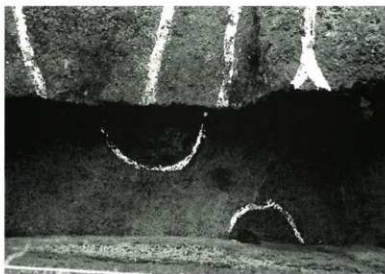


北壁層位の状況

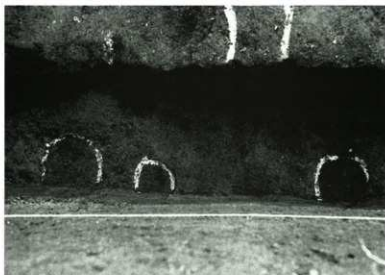
PL. 3 橋牟札川遺跡遺構検出の状況②



畠跡埋没状況



第7層上面ビット検出状況①(柱穴：上部，柱穴5：下部)



第7層上面ビット検出状況②(左から右へ，柱穴1.2.3)

PL. 4 橋牟礼川遺跡遺構検出の状況と層位



上 吹 越 遺 跡





## 第1章 遺跡の位置と環境

上吹越遺跡の発見は、昭和44年に宅地内で古墳時代の土器片が採集されたことがきっかけである（指宿市誌に掲載）。現在、当該地は畑地帯整備事業によって畑地が区画されており、区画整理以前の地形の起伏については不明である。

平成9年度に県営畑地帯農道網整備事業（魚見地区）に伴って、指宿市教育委員会が上吹越遺跡の確認調査を実施した。約100mの舗装化予定の砂利敷き農道内において、3ヶ所のトレンチを設定し調査を実施した結果、橋牟礼川遺跡の標準層位の第4層に相当する黒色土層を1.5～2mの層厚で確認している。

上吹越遺跡の東側には下吹越遺跡が所在している。この遺跡は、平成6年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施したサンオーシャンリゾート計画に伴う計画地域の畑地内の分布調査で、土器片や陶磁器片が採集され、新たに発見された遺跡の一つである。さらに、下吹越遺跡の東南側には指宿市立魚見小学校上の台地にある魚見小学校上遺跡があり、この遺跡内の畑地からは、古墳時代の土器片や敷石などの生活道具が採集されている。

上吹越遺跡の西側には、縄文時代後期の線刻画土器が採集された大園原遺跡が所在し、さらに、弥生時代の集落跡が確認されている宮の前遺跡、柴立遺跡、中川遺跡が点在している。

このように、当該地は、周辺遺跡の内容から、縄文時代後期、弥生時代、古墳時代の各時代の生活跡が展開していることが予想される地域である。また、周辺の遺跡において、中世（鎌倉～室町時代）の土師器片が包含されている黒色土層が発達していることから、中世の生活遺構や集落も展開していた可能性も考えられる。

（文責 鎌田）

## 第2章 層 位

上吹越遺跡の調査履歴は、平成9年度の農道舗装に伴う確認調査のみである。ここでは、上吹越遺跡及び隣接する下吹越遺跡での確認調査の成果も踏まえて、両遺跡で確認された地層の堆積状況から、下図のとおり暫定的に標準層位を設定しておきたい。

第1層
第2層
第3層
第4層
第5層
第6層
第7層
第8層
第9層

- 第1層：畑地帯整備のため大部分が耕作土であり、さらに整備段階での客土も確認されている。現在でも畑地内では、陶磁器片や土器片が採集されている。
- 第2層：中世黒色土層。鎌倉時代から室町時代の遺物を包含している地層である。非常に腐植が発達しており、厚い地点では2mを測る。
- 第3層：紫コラ火山灰層。この周辺では紫コラ火山灰の層厚は薄く、5cm前後に留まっている。これまでの調査では紫コラ火山灰や火山礫に直接被覆された遺構の検出はない。
- 第4層：暗オリーブ色土層。橋牟礼川遺跡の基本層序第6層に対比ができる。橋牟礼川遺跡の成果から奈良時代から平安時代の遺物包含層と考えられるが、調査では出土例はない。
- 第5層：青紫コラ火山灰層。この周辺では非常に堆積が薄く、層としてはなくブロックとして点在している状況である。
- 第6層：橙色土層。橋牟礼川遺跡の基本層序第8層に対比が可能であり、古墳時代の遺物包含層である。
- 第7層：暗紫コラ火山灰層。3mm前後の小礫によって構成されている。
- 第8層：明褐色土層。橋牟礼川遺跡の基本層序第12層に対比が可能である。
- 第9層：池田カルデラ噴出物堆積層。約5,500年前に噴出したもので火砕流堆積層が主体である。

第8図 上吹越遺跡標準層位模式図

## 第3章 確認調査

### 第1節 調査の経緯と概要

平成10年の10月、指宿市内の南新村建設から、個人住宅地内の擁壁工事中に土器片が出土したとの連絡があり、指宿市教育委員会に多数の土器片が持ちこまれた。土器片は、弥生時代後期を主体とするもので、ほぼ完形に近い保存状態の良好な壺棺の可能性もある壺形土器も含まれていた。

周辺住民に旧地形について聞き取りをした結果、西方4288-1・2や西方4285周辺は、宅地造成をする以前は急な斜面をもつ小さな丘であり、小丘の斜面には、土器片が顔を出していたとのことである。さらに、宅地造成の段階や芋穴を掘った際にも完形品を含め土器片が多数出土したが、今はその所在は不明とのことであった。実際に、宅地周辺の範囲を踏査すると、小片ながら土器片を表探することができた。これら土器片が発見された地点の周辺に、同様な遺構や土器などを包含する地層が残存している可能性があることから、確認調査を行うこととなった。

確認調査を実施した地点は、指宿市西方上吹越4288-1・2に所在する壺棺が出土した地点の南側に隣接している宅地内の畑地内である。(第9図を参照) 確認調査は、平成10年12月7日から平成11年1月15日の期間で実施した。確認調査地点は、壺棺が出土した地点より標高で約35~50cm程度低く、畑地として利用されていたため、包含層の残存状況が危惧された。壺棺が出土した地点の観察では、青コラ火山灰と判断ができる地層がブロック状に確認ができた。

確認調査では、第10図の配置でトレンチを設定し、包含層の有無の確認と遺構の検出に努めた。

(文責 鎌田)

### 第2節 調査地点の層位

第1層：耕作土。土器片や陶磁器片が含まれているが、攪乱をうけたものと考えられる。この層中から、馬小屋建造や芋穴に伴う掘り込みが行われている。

第2層：宅地造成時の盛土。約20cm前後の層厚が確認された。

第3層：黒色土層。地層としては確認できないが、第4層上面で検出できた遺構の埋土として残存している。本来的には堆積していたと考えられるが、おそらく、宅地造成段階で除去されたと予想される。

第4層：暗紫色固結火山灰層。通称「暗紫コラ」と呼称される開聞岳の火山性噴出物堆積層である。橋牟礼川遺跡の基本層序の第11層と対比ができる。3mm前後の小礫が多く含まれている。ここでは、固結した火山灰は2~3cm前後と層厚が薄いのに対し、火山礫が含まれる地層は約20前後の層厚がある。

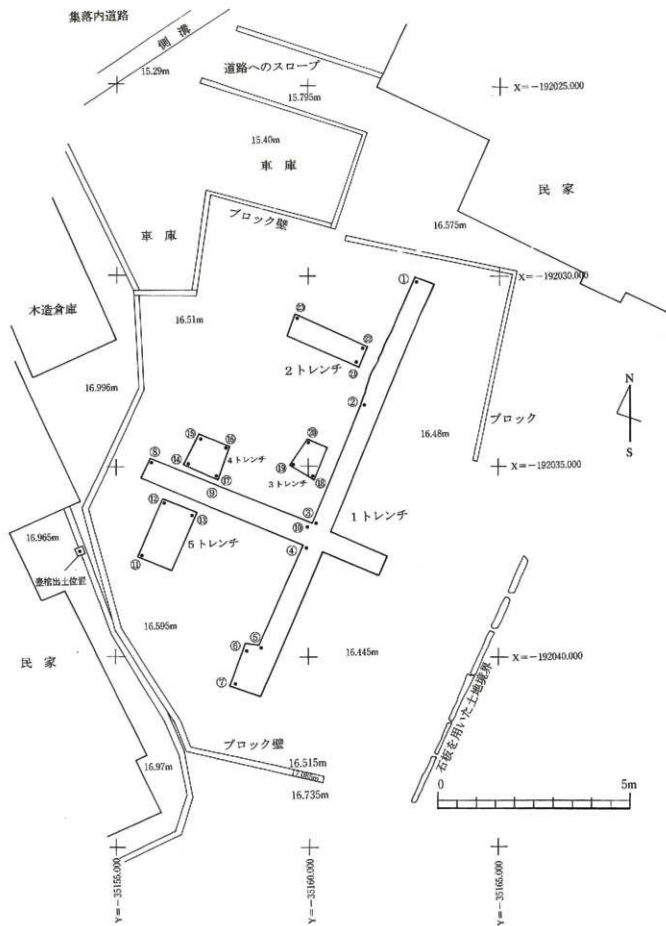
第5層：明褐色土層。橋牟礼川遺跡の基本層序の第12層(弥生時代前期~中期)と対比ができるものと考え、硬く引き締まっている。遺物の出土はない。7.5YR7/1, 5YR5/1の色調を呈する1~2mm程度の粒子を含む。

第6層：池田カルデラ噴出物堆積層：今から約5,500年前に池田カルデラの火山砕屑堆積物で、いわゆるシラスである。

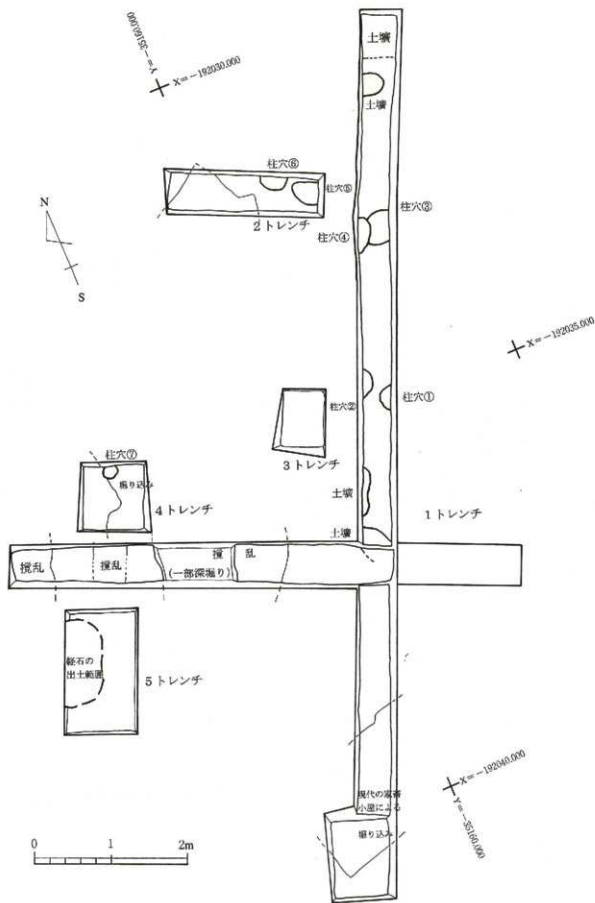
確認調査での地層の観察から、工事中に出土した壺棺や多数の土器片が包含されていた地層(橋牟礼川遺跡基本層序第10層に相当)は、トレンチを設定した地点では、宅地造成の段階で、第3層の黒色土層と共に除去されているものと考えられる。

### 第3節 遺構について

第4層上面において、第3層を埋土とする遺構を検出できた。直系約20~30cm前後の柱穴と推測ができるものである。トレンチ調査のため、全体のプランや規模については把握することができなかった。また、埋土として入り込んでいる第3層は、宅地造成段階で除去されており、遺構の播磨時代・時期について言及することが出来ない。現段階においては、第3層が埋土であることから、中世(鎌倉時代~室町時代)の可能性のあるものと判断しておきたい。

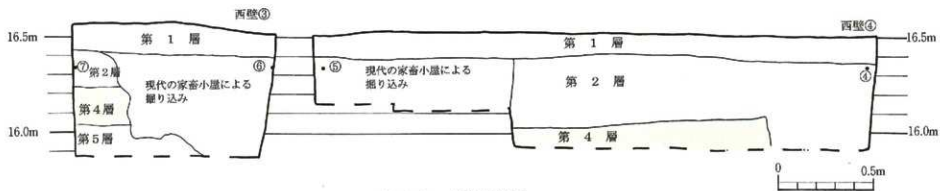
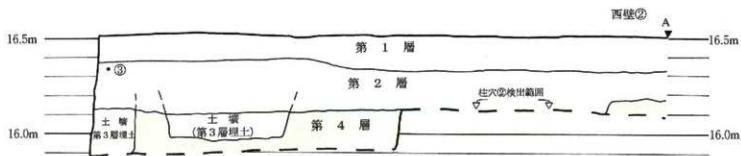
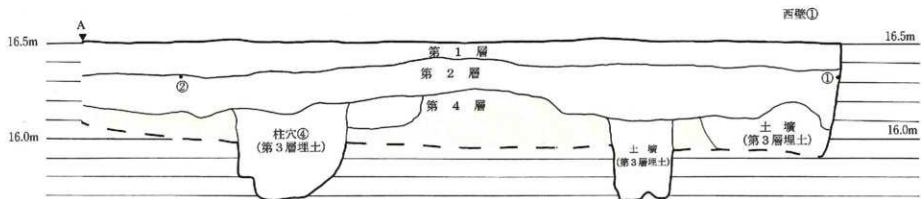


第9図 上吹越調査地点図 (S=1/20)

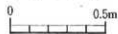


第10図 遺構検出状況図 (S=1/50)





1 トレンチ 西壁土層断面



第12図 層位断面図② (S=1/20)

#### 第4節 遺物について

第13図～第17図の遺物は、上吹越遺跡における工事中に見えられた遺物である。調査時点では包含層は残存していなかったため、いずれも表面採集されたものである。特に壺棺(No.1)は工事施工者により取上げられ、洗浄後に教育委員会に持ち込まれた資料である。

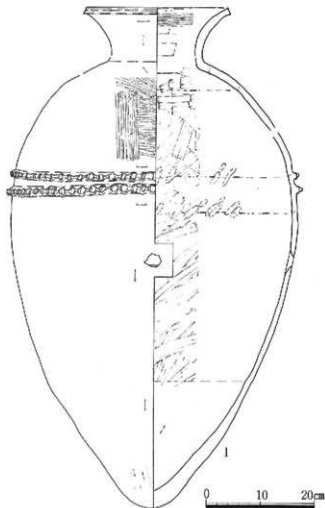
##### 壺棺 (No.1)

復元高92.5cm、胴部最大径54.6cmを測る。全体に縦長の器形で底部は尖底状の丸底となる。

肩部～頸部屈曲部にかけて全周の約3分の1程度が欠損し、口縁部～頸部屈曲部も2分の1程度が欠損する。割れ口の状況から、土中で割れたものではなく、焼成後に割られたものと考えられる。口縁部～頸部屈曲部は胴部に接合しないため、割れ口部分に、これを補充した状態で埋置された可能性が考えられる。また、突帯下部の胴部中央付近に焼成後穿孔が施され、全体に黒色塗布の痕跡が残ることから、この遺物は壺棺と考えられる<sup>11)</sup>。

口縁部復元径は16.4cm。口唇部は装飾的に作られており、断面「コ」の字状の口唇部平坦部はハケメよって幅8mm程度の凹部となり、工具痕が突帯状の痕跡を作りだしている。また、口唇上端部は口縁内部の横方向のナデによって形が形成され、上方につまみ上げられたような形状となる。なお、外面は全体的に丁寧なナデ仕上げが施されるが、特に肩部外面と口縁部内面上半のみに研磨が施されている。

突帯は二条。下段の突帯が高く、高さ最大1.1cmを測る。工具によるキザミは上段が浅く、下段が深い。



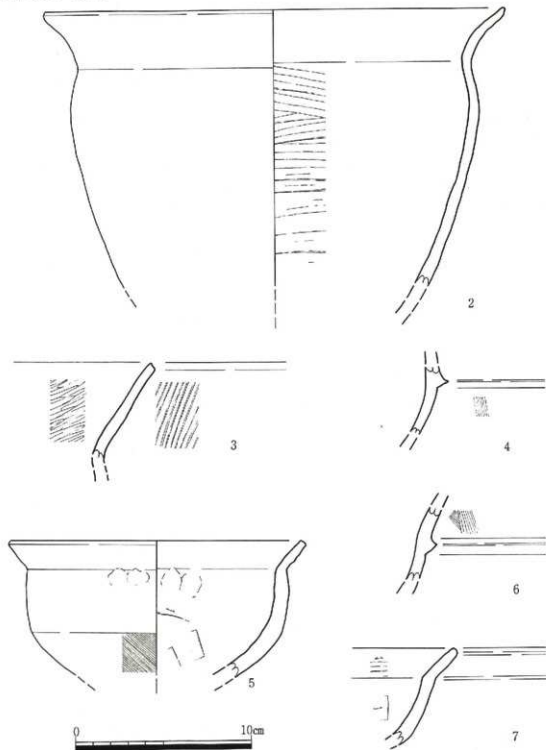
第13図 遺物実測図① (S=1/7)



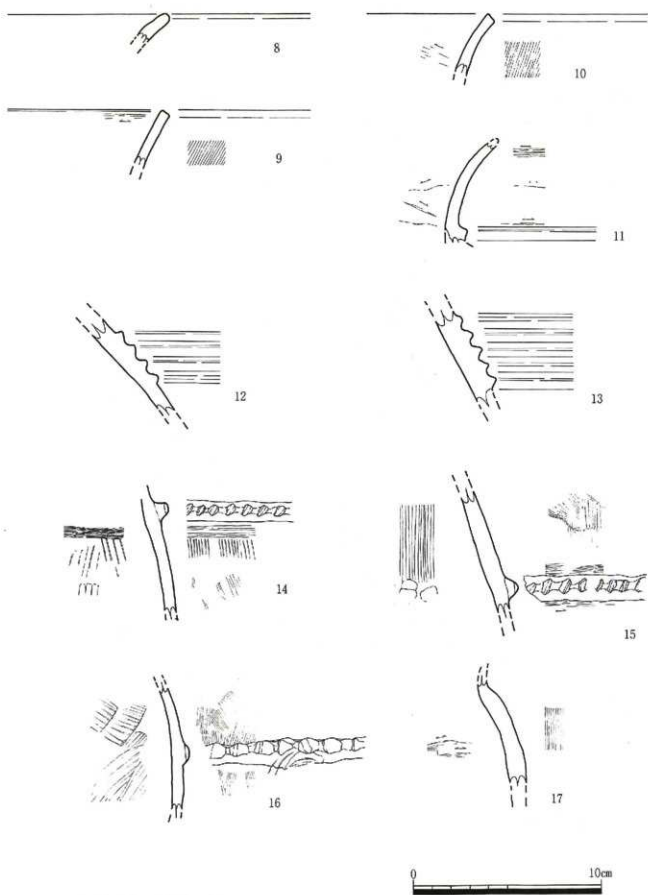
キザミは工具を垂直に近い角度で押し付け、斜めにはねる方法で施文される。キザミの位置は上下の突帯で揃っている。

内面調整は、胴部下半で下から上へ斜め方向のナデ、肩部内面は横方向のナデが施される。工具による調整は時計周りに施されている。内面に粘土帯の接合痕が明瞭に残り、胴部中位では斜め方向のユビオサエで粘土帯を接合した痕跡が残る。

変形土器 (No. 2・No. 3)



第14図 遺物実測図② (S=1/2)

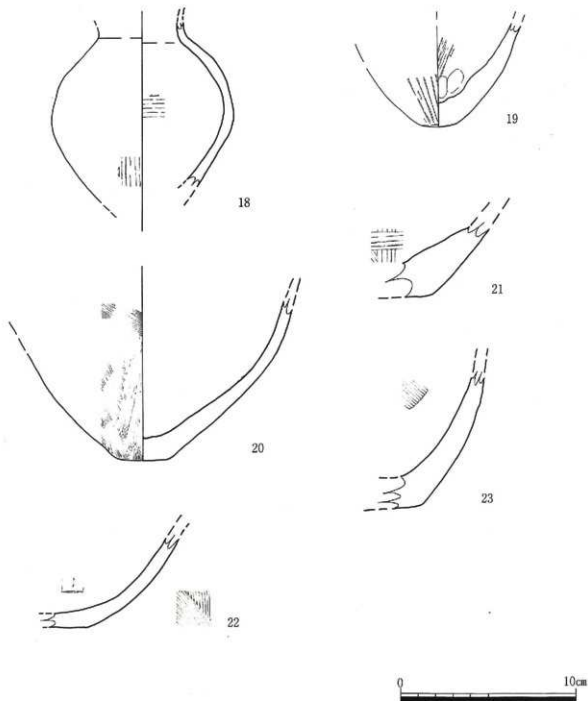


第15图 遗物实测图③ (S=1/2)

No. 2は、口縁部から胴部破片であり、No. 3は口縁部破片である。いずれも緩やかに外反する口縁部形態を呈する。調整はハケメのちナデを基調とするが、No. 3の内面はミガキが施される。弥生時代後期に帰属すると考えられる。

鉢形土器・碗形土器 (No. 4・No. 5・No. 6)

No. 4・No. 6は胴部片で、外面に断面三角形の突帯を一条巡らす。突帯は先端が尖り、つまみ上げ形成されたものである。No. 5は口縁部が外反し、胴部がやや張る。胴部下半で屈曲し、底部にかけてハケメが明瞭に残る。No. 7は碗または高杯の杯部の口縁部～胴部片と考えられる。いずれも弥生時代に帰属する遺物と考えられる。



第16図 遺物実測図④ (S=1/2)

### 壺形土器 (No. 8～No.24)

No. 8～No.10は弥生式土器と考えられる口縁部破片である。No. 9とNo.10は口唇部が丁寧なヨコナデにより平滑に仕上げられる。No.11は成川式土器と考えられる。口縁部は緩やかに外反し、頸部屈曲部に断面台形の一条突帯を巡らす「笹貫式土器」の特徴を有する。

No.12～No.17は胴部破片である。No.12・No.3は胴部上半の破片であり、複数条の三角突帯を巡らす、弥生時代中期の「山ノ口式土器」の特徴を有する。No.14～No.16は胴部に刻目突帯を巡らす。キザミはいずれも工具により斜めに施され、外面は縦方向のハケメが施される。弥生時代後期に帰属するものと考えられる。

No.17～No.19は小型壺形土器である。No.17は頸部～胴部破片である。No.18は頸部～胴部下半部破片である。丸底である。外面に工具痕が明瞭に残り、底部内面には粘土を抉り取った工具痕が明瞭に残る。

No.20～No.24は底部破片である。No.20・No.22～No.24は平底であり、No.21はレンズ状平底である。

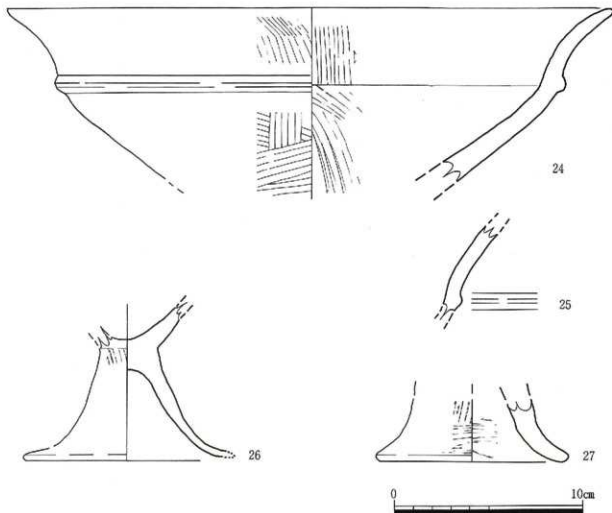
### 高杯形土器 (No.25～No.28)

No.25・No.26は杯部破片である。いずれも肩部に一条の突帯を巡らす。No.25は内外面ともハケメを施した後に、外面の突帯下部を除きナデを施す。弥生時代後期に帰属すると考えられる。

No.27・No.28は脚部破片である。

(文責 中摩)

註  
(1) 下山氏のご表示による。



第17図 遺物実測図⑤ (S=1/2)

## 第4章 考察 —まとめにかえて—

今回、個人住宅の擁壁工事に伴い多数の弥生式土器とともにほぼ完形に近い壺形土器が出土したことがきっかけとなり、上吹越遺跡について、その周辺地点の包含層の有無と遺跡の性格を把握するために確認調査を実施した。壺形土器が出土した東側隣接地の畑地にトレンチを設定して確認調査を実施したところ、本来堆積していたと考えられる中世黒色帯層や紫コラ火山灰層、弥生時代後期の遺物包含層が、造成段階において除去されていることが判った。また、造成段階において約15～20cmの盛土をしていることも確認された。

第9図のトレンチ設定位置図にも記しているが、壺形土器が出土した地点の個人住宅東側とコンクリートブロック壁を挟んだトレンチ設定地では約50cmの比高差があり、レベル的にも後者のほうが低い地点であった。

確認調査の結果、工事中に発見された壺形土器等が含まれていたと考えられている遺物包含層は残存していないことが確認された。

橋牟礼川遺跡で鎌倉時代から室町時代の遺物包含層である中世黒色帯を埋土とする柱穴や土塙が検出されたが、面積的に狭いトレンチでの確認調査では、その規模やプラン、遺構の性格などについての詳細な検討ができる情報を抽出することができなかった。また、遺構の埋土である中世黒色帯は、造成段階で除去されているため、層としては残存していないため、具体的な時期を特定できる遺物の出土もなかった。造成後の地層から掘り込まれた土壌が多数確認されているが、地権者に現地で確認していただいた結果、家畜小屋や倉庫を造る時に掘り込んだものであるとのことであった。

また、5トレンチでは、軽石がまとまって出土している地点があった(第10図)が、地層的な判断による时期的には近現代の時期が想定できるが、そのまとまりの意味性については不明である。

工事中に出土した地点の東側隣接地にトレンチを設定したものの、宅地造成時の地ならしの為遺物包含層を確認し、完形品に近く前記したとおり壺棺と考えられる壺形土器の追加資料の出土や関連する遺構の検出は出来なかった。しかしながら、土地の立地状況は西側にいくにつれて標高的に高くなっており、土地の造成も行っていったことから、周辺に当該時期の包含層がまだ残存している地点があると予想される。

上吹越遺跡において、弥生時代の遺跡としての新しい知見が附加されたことは大変重要なことであり、これまでに周知化されている弥生時代の遺跡である宮の前遺跡をはじめ周辺の遺跡との関連についても今後検討していく必要があるものと考えられる。

特に、今回発見された大型の壺形土器は、法量的に南部九州最大のものであると考えられる。また、外面に黒色塗布や胴部に穿孔が認められること、焼成後に一旦割られたと考えられる頸部～口縁部の破片が、それを補充するように出土している状況、そして横位での出土状況などから壺棺である可能性が高いと考えられる<sup>1)</sup>。指宿市においては弥生時代における壺棺の事例は知られておらず、貴重な事例である。

㈩新村建設の会長新村友義氏、取締役義信氏の立会いのもと、壺形土器が出土した地点の確認や、工事段階での細かな状況について説明して頂き、さらに工事写真の提供もあり、多大なるご配慮を頂いた。ここに記して感謝を申し上げたい。(文責 鎌田)

註

(1) 下山寛氏よりご教示を頂いた。

表1 観察表1

図号	形状/%	器種	保存法	部位	色内	色外	色肩	色底	胎土粒	胎材	調整	その他
1	工事一式1	壺形土器	彫光形		7.5YR4/3 5YR4/2	10YR3/1 7.5YR3/4	7.5YR4/2 10YR4/2	赤色胎面 3YR5/4	微砂粒を含む 赤色胎面	カ、セ、 白、黒、 灰	内・ハケメのちナゲ 外・ハケメのちナゲ 口唇・ヨコのハケのちヨコナゲ	
2	工事一式 32-24	壺形土器	破片1/4 口縁部破片 径26.2cm	口縁部	10YR7/3 7.5YR3/2	10YR6/4 2.5Y5/4	N4/0		微砂粒を含む	カ、ウ	内・ハケメのちナゲ 外・ハケメのちナゲ 口唇・ヨコのハケのちヨコナゲ	良好 傾きギモン
3	表探3	壺形土器	破片	口縁部	7.5YR6/6 N3/0	2.5YR5/6	2.5YR5/6 N3/0		細砂粒、 微砂粒を含む	カ、セ、 黒、白	内・ミガキ 外・ハケメのちナゲ 口唇・ヨコナゲ	良好 傾きギモン
4	表探14	鉢形土器	破片	突部部	2.5YR6/6	2.5YR5/8	5YR6/4		微砂粒を若干含む	カ、ヤ、 白、黒、 灰	内・ヨコナゲ 外・ハケメのちナゲ 突・ヨコナゲ	良好 傾きギモン
5	工事一式 27	鉢形土器	4/1破片 口縁部破片 径17.6cm	口縁部	7.5YR6/4 N3/0	5YR6/6 10YR7/4	7.5Y7/2 10YR4/1		細砂粒、 微砂粒を含む	カ、セ、 ウ、白、 黒	内・工具によるナゲのちナゲ 外・ヨコナゲのちナゲ 外・工具によるナゲのちナゲ 一部ニヒオサニの痕、 ハケメ 口唇・ヨコナゲ	良好 傾きギモン 反転 外面ハケメ 9cm/φ
6	表探11	鉢形土器	破片	突部部	7.5YR4/2 5YR6/6	5YR6/6 7.5YR6/4	5YR6/6 5YR5/1		微砂粒を含む	カ、セ、 白、黒	内・ヨコナゲ 外・ハケメ、 ヨコナゲ、 突・ヨコナゲ	良好 傾きギモン
7	工事一式 31	壺形土器	破片	口縁部	7.5YR7/4	5YR6/6 7.5YR6/4	7.5YR6/4		微砂粒を含む	セ、ウ	内・ハケメのちヨコナゲ 外・ヨコナゲ、ハケメのちヨ コナゲ 口唇・ヨコのハケ	良好 傾きギモン 外面ハケメ 3本/φ
8	表探4	壺形土器	破片	口縁部	7.5YR4/4	7.5YR6/6	7.5YR6/4		砂粒を若干含む 微砂粒を若干含む	白、黒、 赤	内・ナゲ 外・ナゲ 口唇・マメツ	良好 傾きギモン
9	表探1	壺形土器	破片	口縁部	5YR7/6	5YR7/6	7.5YR6/1		細砂粒、微砂粒 を含む	カ、白、 黒	内・工具によるナゲのちナゲ 外・工具によるナゲのちナゲ ハケメのちナゲ 口唇・ヨコナゲ	良好 傾きギモン
10	表探2	壺形土器	破片	口縁部	7.5YR5/4	7.5YR6/4	N3/0		微砂粒を若干含む その他	カ、ウ	内・工具によるナゲのちナゲ 外・ハケメのちナゲ 口唇・ヨコナゲ	良好 傾きギモン
11	表探5	壺形土器	破片	口縁部	7.5YR7/6 5YR6/6	7.5YR7/3 2.5YR6/6	5YR7/6 7.5YR4/2		細砂粒、微砂粒 を含む	カ、セ、 ウ、白、 黒	内・工具によるナゲのちナゲ 外・工具によるナゲのちナゲ ハケメのちナゲ 突・ヨコナゲ	良好 傾きギモン
12	表探12	壺形土器	破片	突部部	5YR6/6	5YR6/6	5Y5/1		微砂粒を含む	セ	内・ヨコナゲ 外・ヨコナゲ 突・ヨコナゲ	良好 傾きギモン
13	表探13	壺形土器	破片	突部部	5YR6/4 5YR5/4	5YR5/4	5YR5/1		微砂粒を含む	セ	内・ヨコナゲ 外・ヨコナゲ 突・ヨコナゲ	良好 傾きギモン
14	表探6	壺形土器	破片	胴部	10YR5/3 2.5YR5/6	10YR4/2	7.5YR6/1		砂粒、細砂粒を 若干含む	カ、セ、 白、黒	内・工具によるハケメのち ユビによるヨコナゲ 外・ヨコナゲ、ハケメのち ユビナゲ 突・ヨコナゲ、はりつりヨコ ナゲ、キズ	良好 傾きギモン

表2 観察表2

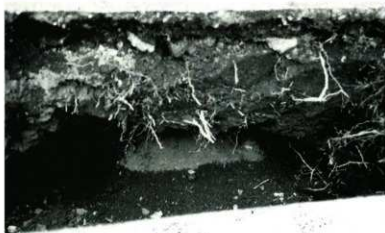
図番	取上げNo	形 態	保存方法	部 位	色 内	色 外	色 内	色 外	塗 土 粒	塗 料 材	観 察 票	その他
15	表探8	雲形土器	破片	突嘴部	5YR5/6	7.5YR5/2	5Y2/1		緑砂粒を若干含む 黄砂粒を含む	カ、セ、 白、黒	内・ハケメ 外・ハケメ 突・はりつけ工具による キズミ	良好 縦きギモン
16	表探7	雲形土器	破片	胴 部	2.5YR5/6	7.5YR6/4	N2/0 N5/0		砂粒、緑砂粒を 含む	カ、セ、 白、黒	内・ハケメ 外・ハケメ 突・はりつけ工具による キズミ	良好 縦きギモン
17	表探16	小型雲形 土 器	破片	胴 部	5YR5/6	5YR6/5	5YR6/6 7.5YR5/1		黄砂粒を含む	カ、セ、 白、黒、 赤	内・工具やコビによるナゲ 外・ヨコナゲ	良好 縦きギモン
18	工事一般 30	小型雲形 土 器	胴部最大径 10.3cm	胴 部 (口縁 部と底 部の間)	5YR5/6 N2/0	5YR6/5	N3/0		黄砂粒を含む	セ、ウ	内・ヨコのハケメのちコビナ ゲ 外・タテのハケメのちコビナ ゲ	良好 縦きギモン 表面 内面ハケメ 4本/cm
19	表探17	雲形土器	破片	底 部	7.5YR5/4	5YR6/5	5YR6/5 10YR6/1		緑砂粒、黄砂粒を 含む	カ、セ、 白、黒	内・ナゲ、ハケメ 外・ケズリのみナゲ	良好 縦きギモン
20	工事一般 28	雲形土器	底面最大径 14.1cm	底 部	10YR5/6 2.5Y4/2	10YR7/4 2.5Y4/1	5YR7/5		黄砂粒を含む	セ、ウ	内・ハケメのみナゲマメツ 外・ハケメのみナゲ 底・マメツ	良好 縦きギモン 表面ハケメ 8本/cm
21	表探18	雲形土器	破片	底 部	5YR5/6 N2/0	7.5YR6/5	N4/0	底 5YR5/4	黄砂粒を含む	カ、ウ	内・ハケメ 外・ハケメ、マメツ	良好 縦きギモン
22	表探25	雲形土器	破片	底 部	N2/0 10YR5/3	5YR7/5	5YR6/4	底10YR7/ 4	黄砂粒を含む その他	ウ、チ	内・ハケメのみナゲマメツ 外・ハケメのみナゲ 底・マメツ	良好 縦きギモン 表面ハケメ 8本/cm
23	表探20	雲形土器	破片	底 部	10YR5/6	5YR6/8	N4/0	底 10YR6/5	黄砂粒を含む	ウ	内・ハケメ 外・ハケメのみナゲ	良好 縦きギモン 内面ハケメ 4～5本/cm
24	表探10	高 塚 形 土 器	破片 口縁部最大 径20cm	口縁部	5YR5/4	5YR5/6	N2/0 5YR5/4		黄砂粒を 含む	カ、ウ	内・ハケメのみヨコナゲ、 ハケメのみナゲ 外・ハケメ 口・ハケメのみヨコナゲ 突・ヨコナゲ	良好 縦きギモン
25	表探15	高 塚 形 土 器	破片	坪 部	5YR5/6	7.5YR7/4	N3/0		砂粒を若干含む 黄砂粒を含む	セ、白	内・ナゲ 外・ヨコナゲ 突・ヨコナゲ	良好 縦きギモン
26	工事一般 25	高 塚 形 土 器	胴部最大径 19.2cm	胴部資料	7.5YR7/4	7.5YR7/4	N3/0	胴内 7.5YR7/4	黄砂粒を含む	セ	内・ハケメ 外・ハケメのみタナゲ 胴内・タナゲ、ヨコナゲ 胴外・ハケメのみタナゲ、 ヨコナゲ	良好 縦きギモン 内面ハケメ 2本/cm 外面ハケメ 3本/cm
27	工事一般 29	高 塚 形 土 器	破片 胴1/3保存 最大径 10.2cm	胴部	10YR7/4	7.5YR7/4 5YR6/5			黄砂粒を含む	ウ、チ、 白、黒	胴内・工具によるナゲのら ナゲ 胴外・工具によるナゲのら ナゲ	良好



確認調査地点



確認調査状況



壺形土器出土位置①(取り上げた直後のスタンプ)

PL. 5 上吹越遺跡調査地点

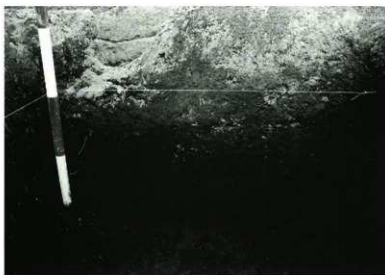




変形土器出土位置②(土砂を入れている部分)



1 トレンチ北壁層位の状況



1 トレンチ西壁層位の状況

PL. 6 層位の状況



5 トレンチ軽石出土状況

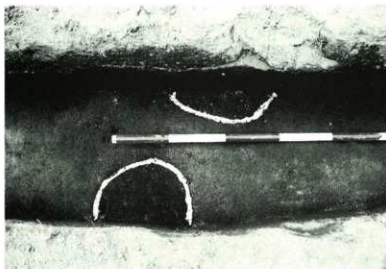


5 トレンチ西壁層位の状況(軽石除去後)



1 トレンチ柱穴等検出状況

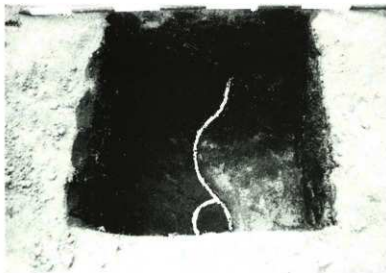
PL. 7 遺構検出の状況①



1 トレンチ(柱穴①：上部，柱穴②：下部)

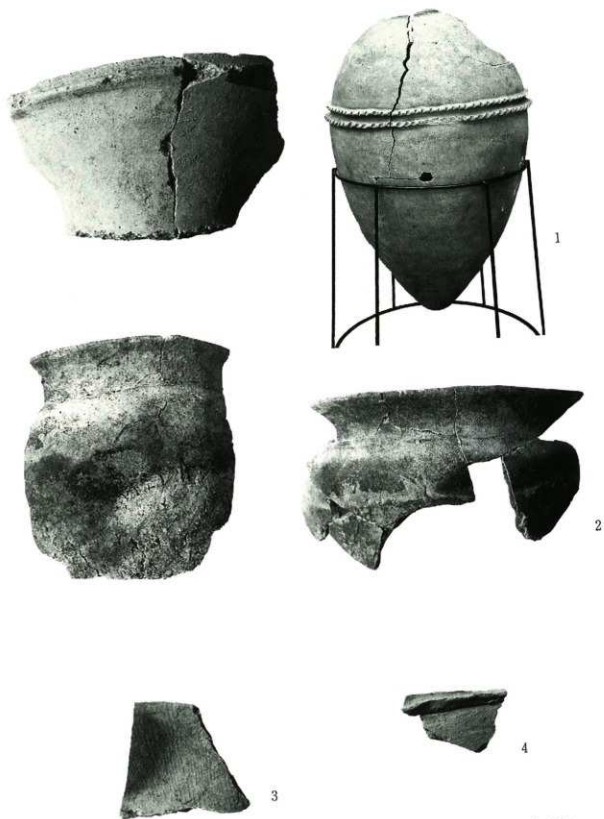


2 トレンチ(柱穴⑤：左端，柱穴⑥：中央下部)



4 トレンチ(柱穴⑦：下部)

PL. 8 遺構検出状況②



No1左 : 50% No1右 : 10%  
 No2 : 40% No3.4 : 50%

PL. 9 上吹越邊跡出土遺物①



5



6



7



8



9



10



11

No5~No11 : 50%

PL. 10 上吹越遺跡出土遺物②



12



13



14



15



16



17



18



19

No12~No19 : 50%

PL. 11 上吹越遺跡出土遺物③



20



21



22



23



24



25



26



27

No20 : 50%  
No21~No27 : 40%

PL. 12 上吹越遺跡出土遺物④

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	はしむれがわいせき・かみひごしいせき							
書名	橋半礼川遺跡 XIV・上吹越遺跡							
副書名	遺跡範囲確認調査報告書							
巻次	14							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	下山 覚・中摩浩太郎・渡部 徹也・鎌田 洋昭							
編集機関	指宿市教育委員会(指宿市考古博物館 時遊館COCOCOはしむれ)							
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 ℡ 0993-23-5100							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はしむれがわいせき 橋半礼川遺跡	はしむれがわいせき 指宿市十二町	46210	233			1998. 7. 1 ～	35	範囲確認
かみひごしいせき 上吹越遺跡	かみひごしいせき 指宿市西方		284			1999. 3. 31	13.8	内容確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
橋半礼川遺跡	生産・集落	874年 奈良～平安	畠跡 ピット		土器片 工事中に採集された資料に、 略完形の壺形土器(壺棺と考えられる)が確認された。			
上吹越遺跡	散布地	弥生						
		不明	柱穴					



橋牟礼川遺跡XIV  
上吹越遺跡

平成11年3月

発行 鹿児島県指宿市教育委員会  
指宿市十町2424  
☎0993-22-2111  
印刷所 中央印刷株式会社  
鹿児島市春日町12番16号  
☎099-247-3300





